

松村通信第43号

2002年3月14日

松村勝弘

鈴木宗男問題

鈴木宗男議員の証人喚問を見ていて、はたと考えるところがあった。これって今の日本の、あるいは戦後日本の縮図ではないのか、ということだ。日本という国の品格に関わる問題だと思う。

北方領土と土建・利権 証人喚問で明らかになった最大の問題は、鈴木宗男議員という議員が日本ではなく、むしろロシアの利害を代表し、私益を追求していたということだ。北方四島を日本の領土と考える日本政府の考え方と全く相反する現状固定化の上で、援助をし、そこに建造物を建て、それを建設業者に任せ、利権を得る、これが鈴木宗男議員のやり方だったことが明らかになった。北方四島を政策的にどうすべきかは措いて、問題を考えると次のことが明らかになる。日本の国益を図るのではなく、ロシアの国益のために北方四島に建物を建てる。その過程で経済的利得を得る、というものだ。では、これは北方だけだろうか。

対米問題と経済問題 日本の国益を捨てて、ロシアの国益のための行動をとって、私益を得る、これが鈴木宗男議員の行動原理であった。けれどもそれは鈴木宗男議員だけではないだろう。多くの日本の政治家が行っているのは、日本の国益を捨てて、アメリカの国益のためになる行動を行って、それで私益を得る。経済的利益を得る。そういう行動をとっていないか。それは政治家に限らないかもしれない。独立国に外国の軍事基地があるというのは、本来は、異常である。その異常を異常とも思わず、米軍基地をおいて、思いやり予算で駐留経費まで分担して、有り難く

米軍基地をおし戴き、その代わり経済的交流で儲けさせてもらう。これが日本の対米関係ではないのか。

しばしば、90年頃までの日本の政治・経済を揶揄して、経済一流、政治は三流というものだった。あるいは、経済優先外交というものだった。外務省もその路線で動いていた。日本人がエコノミック・アニマルと評されていたことを思い出す。プライドを捨てて経済的利益を得る、というのがそこでの含意だ。名を捨て実を取る、といえば聞こえはよいが、日本人の品格が疑われたものだ。その行き着く先に、国益より私益を優先するという行動様式がでる。

実のところ、私とて、戦後の日本人の典型であるから、私益優先の風潮の洗礼を受けた人間だ。だからよくわかるのである。しかし、それでは世界では信頼を得られないだろう、そういうことがよく分かってきた。遅まきながら。日本の一部(?)政治家にはそこがいまだに分らないようだ。経路依存だ。変わらない。変化対応できない。成功体験にあまりにも寄りかかっている。

土建体質 米ソ冷戦時代とは環境は大きく変わってきている。にもかかわらず冷戦構造と同じ思考様式を続けている、とはよく言われることだ。変化対応ができない。日経ビジネス今週号(3月11日号)に地方公共団体の土建体質が取り上げられている。一旦やると決めた事業を途中で見直すことができない様子がよく分かる。一旦決めたら突っ走る。そして、赤字を垂れ流す。そういう公共事業が多い。かつての成長期同様に将来の需要増加を見越して、道路をつくってしまう。できた道路は閑古鳥が鳴く。北海道の高速道路は自動車より熊の方が多いと誰かが言ったら、それにかみついたのが鈴木宗男議員であった。

公益優先か私益中心か、理念か利益か 私など自己反省しなければならないのだが、理念より現実的利益を重視してきた面がないわけではない。そういう風潮のなかで育ってきた。それはそれでよい。問題はそこから紙一重で、公益より私益を優先しがちになるということである。理念をお題目にすぎないと切っ捨てていたきらいもある。私など戦後日本の左翼の行動様式に義憤を感じ、そんな生意気なことを言っていたことを思い出す。

仏作って魂入れず、理念を先行させているように見えるが、実は利益を優先しているという事例があまりにも多いことも事実だ。そういう左翼の行動に反発したものだ。だからといって理念はどうでもよいということにはならない。この辺りのかねあいが実に難しい。

先の鈴木宗男議員の場合、北方領土返還なる理念を食物にして利益、それも私益を優先していたという最悪のケースである。

加藤問題 同じ自民党の加藤紘一元幹事長の秘書が逮捕された問題は、さらに深刻だ。同氏は改革派でクリーンなイメージがあっただけに、あの加藤氏がカネまみれだったのかと、がっかりした人が多いのではないかと。問題は、だから、明らかに構造的であるといわざるをえないことである。自民党的なるものであると同時に、戦後日本的なるものかもしれない。政治に金がかかるのは事実だろう。アメリカだってそんなきれい事ではない。しかし、こう次から次へと疑惑が出てくると、うんざりする。そこで最初に書いたように、経済一流、政治は三流ということが決して自慢できるものでないだけでなく、その三流の政治に翻弄されているのが今の日本経済だと思う。しかも、経済優先に問題点もある。エコノミック・アニマルは決してほめられているのではなく、蔑視の言葉である。

日本の政治が信頼されないのは、そういう経済優先、理念置き去りのためである。北方領土返還は単なるメンツにすぎない、経済交流が大事だ、といいながら私益を優先する鈴

木宗男議員の言動は、その意味で戦後日本の悪い部分のデフォルメである。その上加藤議員の疑惑も浮上してくるなど、やりきれない。

青臭さの必要 正義などというと青臭いと言われるのが、最近の日本の風潮だ。建て前と本音。戦後日本では建前は重視されず、ホンネが行動の指針であったようだ。でも、それでは信頼もされないし、かえって経済も危うくなる。それが今の日本ではないのか。以前紹介した、寺島実郎『「正義の経済学」ふたたび』は、そのあたりを意識しているのであろう。

こういうことを書いてきて、先ほど経済学部の特任教授小野進先生と会って話していたら、全く同じ事を仰った。青臭さが失われたら大学でない。今の日本の大学はそういう雰囲気ではない。まさにそう思う。で、私はさらに言った。学生が青臭くないのは大人の世界がそうだからではないですか、と。その通り、という答。

私も以前書いたが、知識人のレベルの低下、責任、を小野先生も指摘されていた。寺島実郎氏というビジネスマンですら、ああいう「青臭い」議論を展開されているのに、大学でそれを言う人がいない。全くその通り。かつての立命館大学ならそんなことを言う人がいっぱいいた。ま、少し偏向していたかもしれないが。それなのに、今は誰もそういう話をしない。どういうわけだろう。私は4月からの大学院改革で必要なのは、スキルとフィロソフィーだと人にも言ったが、あえてフィロソフィーといったのは、こういうことなのである。政界、官界、産業界、学界、どこを見回しても権力志向ばかりが目につく。正義はどこへ行ったのだろう。

メールを見て下さい。又何でも意見を。

皆さんの意見を歓迎します。また、メールで意見交換しましょう (matumura@ba.ritsumi.ac.jp)。メールをよこして下さい。個研 Tel(077) 561-4645FAX 兼用